資料2 monkey business

内田樹・柴田元幸「辺境から生まれるもの」モンキービジネス vol. 10

アメリカってしぶとい国なんですよね。安全装置が二重三重にかかっている。システムの耐用年数が限界に近づくと、補正の装置が動き出す。大きな流れとしては、アメリカの文化の「女性化」あるいは「地方化」というものがあるような気がします。アメリカにおける辺境、あるいは周縁から出てくる動きがアメリカの中心のシステム劣化を補正する。そういう動きになっているんじゃないかなと思います。ハリウッド映画というのはそういう点で社会の潮目の変化に敏感なんですよ。あれを見ているとアメリカ人の社会的感受性の変化がよくわかる。

柴田　文学でも、マイノリティ文学が隆盛になってきたというのは八〇年代以降アメリカにはずっとあるんですが、そこで語られる物語というのが、メインストリームの文化とマイノリティの文化の対立という図式とは関係ないものになってきたということはあります。それはいい徴候だと思う。

言語に対する敬意

柴田　内田さんの本にあるように、アメリカ人は、これについてどう思いますかと訊かれたときに、何かを言わなくちゃいけないという圧力にさらされている。自分が意見を持たなければいけないというプレッシャーのもとでずっと育っているように見えます。

内田　自分が知らないことに関しても、必ず意見を言う。こういう人はほんとうに困るんですよ。頑固だから。人間は「知らない話」についてはぜったい譲歩しないから。

柴田　ご著書でもおっしゃってましたが、特にそれが受け売りだとぜったいに譲らないですよね。

内田　日本だと、特に中高年男性に多いですよね。新聞や雑誌で仕込んだ話を受け売りして語る人っ

ているでしょ。そういう人とは僕ぜんぜん話が嚙み合わない。既成の、パッケージされたアイデアをぽんと持ってくるだけだから。講演会なんかでも、質問の意図がまったくわからない人がいる。質問したいんじゃないんです。自分の話を人に聞かせたいだけなんです。

柴田　たしかにそういうのは中高年の男性に多い気がする。定年後の男性で、部下が自分の話を聞くのに慣れていて、仕事を辞めて誰も話を聞いてくれなくなって、どこかで話したいと言うストレスがたまっていって……という感じなのかな。

内田　日本の男性って、六十歳がラインで、それ過ぎると必ず話が長くなるんです。話の芯がなくなって、同じところをぐるぐる回るようになる。企業でもある段階で、重役コースに行く人ともう重役になれない人にはっきり分かれますでしょ。あとの方の人は、もう誰も話を聞いてくれない。人が自分の話を傾聴するという状態は好きなんだけれども、言うことがない。

柴田　自分はそうならないようにしたいですね（笑）。

内田　女の人はそういうふうにつまらない演説する人はあまりいないですね。だいたい「では、私は明日からどうしたらいいんでしょう」という切実なことを訊いてきますね（笑）。

柴田　ボストンで村上春樹さんが講演したときに、観客に一言で質問をしてくれと言うと、ほんとうにみんな一言で訊くんですよね。ああいうところの成熟度は違うと思いますね。たまに長い質問をする人がいるとアジア系だったり（笑）。

内田　日本人はやっぱり言語の問題があるんです。はじめに自分が言いたいことをすぱっと言って、そのあとに二次的な情報をつけるんじゃなくて、まずはどうでもいい話から始めて、だんだんと核心に迫って来るというのは、日本語の文型がそうだからなんです。一番大事な情報が最後にくる。

だから、フランス語で話しているとき一番困るのが、主語をいつも聞き落としちゃうことです。日本語で話しているときは、最初の方を聞き漏らしても、途中から注意して聞いていれば、大事なことは文の終わりの方に来るから、文意を把握するには困らない。だから、日本人が人の話を聞くときの構えは、最初のうちはやや注意力散漫だけど、徐々に注意力が上がっていって、センテンスが終わるところで最高になるんです。英語やフランス語の構文だと開口一番で主語が来るんだけれど、それに対する注意力が一番低い。日本語話者は自動的にそうなっちゃうんです。僕、いつもそうですもの。人の話を途中から聞き出すので、主語と動詞を聞き落としている。だから、何の話をしているのかぜんぜんわからない。

長い話をする場合もそうで、日本人はまずどうでもいい話から始めて、だんだん佳境に入って来て、最後に一番たいせつなことを言う。だから、話している途中で、アメリカ人やフランス人に割り込まれるとショックを受けるんです。あっちの人は文の最初の方に重要な情報がまとまっているから、センテンスの途中まで聞けば、だいたいどの程度の話か見当がつく。だから平気で人の話の腰を折る。日本人はあれができないんです。

柴田　英語圏だと、相手の話を、この人もうやめてくれないかなと思ったら、黙って聞いているのではだめで、何かを言わないといけない。黙って聞いているということは、先を聞きたいという意思表示なんだと思われる。

いま、僕がいる学科には、英語圏からの留学生も結構いるんです。彼らが空気を読まないとは言わないけど、いままでの流れに即したことしか言ってはいけないというような発想には立っていないですね。まずは言わなくちゃ意味がないと思っている。

こないだ村上春樹さんの翻訳者のジェイ・ルービンが来たときに授業をやってもらって、ジェイだから日本語でも英語でもできるんだけど、なんとなくの流れでそのときは英語になったんですね。そういうところでがんばって英語でしゃべろうとするのって、英文科ではなくて国文科の学生だったりするんですよ。英文科の学生は、ちゃんとした英語をしゃべらないといけないというプレッシャーがあるのかな。まあ僕自身なんかはそうだったですね。

内田　福岡伸一先生の本に書いてあったエピソードなんだけど、アメリカでやったある学会で、ドイツ人の会長の人が開会のあいさつで「この国際会議の共通語は英語ではありません」と宣言したんだそうです。会場が騒然としたら「ここでの共通語はプアー・イングリッシュです」と続けた。これは卓見だと思いますね。

コミュニケーションのための外国語では多少発音が変でも、文法が間違っていても、そんなことは気にしないで、言いたいアイデアをとにかくどんどん口にする。その考え方はすごく健全だと思うんですよ。リンガ・フランカ（国際共通語）って、英米文学や英米文化を研究する人が使う英語とは働きがぜんぜん違うと思うんです。僕はこれを「英語」と呼ぶことに反対なんです。英語は英語でね。いまの日本の子どもたちが学習すべきなのは、英語じゃなくて「国際共通語」の方なんです。それはまったく違うプログラムでやらないといけない。英語を学ぶときは、正しい発音、正しい文法構造の英語をきちんと身につけないといけない。その根底には英語圏の文化へのリスペクトや憧れがある。そういう文化的な動機をはっきり持った人が「英語」をやる。コミュニケーション・ツールとして使う人は、自動車の運転やコンピューターの操作と同じ感覚で英語を使えばいい。アメリカやイギリスになんの興味もないんで構わない。中国人としゃべるとき必要だから英語をやるというので構わない

んです。それの切り分けをしないから、いまの日本の英語教育は失敗してるんだと思う。

僕らの学生時代までは、外国語を学ぶ動機というのが、その国や文化に対する憧れだったと思うんです。たとえばフランス語をやる人はランボーが好きで、英語をやる人はシェイクスピアが好きで、というのがあった。文化的なものへの敬意があって、そのための入り口としてその言語を学ぼうとした。それが英語が国際共通語になってしまって、そこですごく混乱してるんだと思います。英語だけやればいい、フランス語とかドイツ語はやらなくていいという乱暴な議論が出てきていますが、それは話がまるで違うんですよ。英語を学ぶことと、国際共通語を学ぶことは、ぜんぜん違うことなんです。それを同列に論じてしまうことがボタンの掛け違いなんです。

外国語を学ぶときは、その言語を持つ文化に対する敬意は必要です。でも、リンガ・フランカを学ぶときはそんなものは要らない。ただの道具だから。言葉に対するある種の「侮り（あなど）」と言っては言いすぎだけれど、「単なる方便」だと括（くく）って構わない。

でも、いまの国際共通語である英語は「覇権国家の国語」でしょ。だから英語をやる人は「これはただの道具だ」とは言い切れない。「超大国の国語」だからというので、使うときにおどおどしている。言語を学ぶときに、文化的な敬意はあった方がいいけれど、政治的威力に対する怯えなんかない方がいいに決まっている。でも、それが混乱している。いま子どもに必死で英語勉強させている親たちの動機は、英米文化に対する落ち着いた敬意じゃなくて、強国に対する浮き足立った恐怖心でしょ。

中世ヨーロッパのリンガ・フランカはラテン語でしたけど、ラテン語の場合はローマ帝国はもうないから、ラテン語を母語とする国民というのはどこにも存在しない。だからラテン語はただの国際共通語だった。でも、英語はそうじゃない。アメリカの覇権に対する恐怖心が強い人間ほど英語を必死

になって勉強する。だから英語はできるけれど国際性がぜんぜんないという人間が量産されてくる。

柴田　アメリカがなくなっても、リンガ・フランカとしての英語がラテン語のようにしばらくは残るということはありえますね。

内田　アメリカが世界の超大国だから英語をやるような人間は、アメリカが没落したらたちまち英語をやめて次の覇権国家の国語に乗り移ろうとするんだと思う。でも、それは間違っていると僕は思います。アメリカが没落したあとの英語がたぶん国際共通語としては一番使い勝手がいいんじゃないかな。

日本人が英語が苦手な理由

内田　日本人はおそらく世界で最も英語の習得が苦手な国民ですね。それは日本語という文法のせいだけじゃなくて、やっぱりマインドの問題です。

柴田　奴隷が主人のようにふるまおうとしているからですか。

内田　奴隷が主人の言語を道具として使うということに対しての、どうにもならない屈託があるんですよ。逆に、アジアの言語はすぐ習得できる。文化人類学の人はインドネシアをフィールドにしている人が多いんですけど、聞くと、インドネシア語って覚えるのが簡単だからって。現地のインフォーマントの話を聴くためには現地語ができないと話にならない、だから言語が簡単なフィールドを選ぶって正直に言う。でも、これこそ「道具的な言語観」の典型でしょ。インドネシアに興味があって学ぶんじゃなくて、言葉が簡単だからインドネシアをフィールドにしようっていうのが（笑）。でも、

たぶんそういう外国語の習得が一番早く効率的なはずなんです。屈託がないから。

柴田　やっぱり、それを学ぶのが必要な文脈に身を置くのが手っ取り早いですよね。日本の場合、たいていの人が生きているのは、実のところ英語できなくてもやっていける文脈だから、要するに必要ない。英語ができないと困る、というくらい世界が広がるのがいいかどうかはわからないけど。

内田　国際共通語があって、それ一つできれば世界中の人とコミュニケーションできるというのは、ほんとうにいいことだと思うんです。それをアメリカとかイギリスとかいう国民国家の国語を学習する伝統的な仕方で教えるのが間違っているんです。英語ができると中国人ともロシア人とも会話できるというのはほんとうにすばらしいことですからね。

（二〇一〇年四月三〇日、ジュンク堂書店池袋店にて）